

海士集落におけるオオアマ考

歳 森 茂

はじめに

まずはじめにことわっておきたい。一昔前はアマの多い海村をアマ部落といったものであるが、現在は海士集落というほうがふさわしいと思われるので、この語を使用する。オオアマの意味・内容について岡氏¹⁾は、(徳島県の)阿部(アブ)では3~4尋(1尋は5尺)しか潜れない者を小アマ、7尋以上潜る者を大アマ、中間の者を中アマと称している、と述べ、又、河野氏²⁾は、オオアマとは目、耳、鼻などが良く、深い所にも潜れ、技術、人格ともに優れたアマを指す、と述べている。これは一応卓見である。しかし、かつてのオオアマはそうであったが、現在は人格は関係ないとして、夏のシーズンの間(ほぼ3カ月)に200万円以上かざぐ者をオオアマ、それ以下を中アマと分ける人もある。各集落のトップアマについてその潜水時間(ヒトカシラ)をきくと、1分半ないし2分間の模様である。息が長い(肺活量が大きい)ことがオオアマの一つの条件である。岡氏は阿部において、男女の性差によるアマの潜水能力を始め、各種の医学的診断をアマに行い、男アマは比胸囲において非アマをしのいでいること、女アマは身長比肺活量において非アマをしのいでいること及びオオアマは男子に多いこと(参考表1)などを挙げている。この岡氏の30年以上も前の男女アマに関する詳細な医学的診断は敬服に値するものであるが、それ以外にオオアマ又はアマに優れた者に関する分析や説明は寡聞にして知らない。阿部ではスマートな体型はアマに向かないといい、陸上では鈍重に見える者が水中では強いという。阿部・志和岐(シワギ)ではオオアマは胸が厚い(前から見ても横から見ても)という。又、阿部ではオオアマ家系がいわれ、あの家は代々アマにえらい(アマに優れている)などといわれる。これには例外もある。本稿はオオアマの採貝能力・実績などを中心に、オオアマを検討し

てみたもので、対象はいずれも徳島県の海士集落におけるオオアマである。

参考表 1 最大潜水深度
男女別員数

深さ (尋)	男	女
3	5	11
4	5	5
5	4	4
6	5	7
7	8	2
8	7	2
9	6	0
10以上	7	0
合 計	47	31

1)

(岡芳包, 阿部のアマについての調査, 1956)

1. 大正時代のオオアマ

筆者らは昭和58年11月6日、由岐町文化祭「由岐の歴史と人々の生活展」に展示されていた大正年間のアマの水揚帳を分析し、当時の阿部のアマ達の能力をある程度察知することができた(表1, 表2)。そして、一方、この水揚帳にも載っている(当時31才の)新開岩太郎さん(聞き取り時の年齢92才)を同年12月20日、自宅に訪ねて、思い出話など語ってもらった。当日のテープの一部を以下展開する。

表1 大正10年6月

アソビ個人別水揚実態 (数量)

(単位:貫, 匁)

氏名 (年齢)	4日	5日	6日	7日	8日	9日	13日	14日	15日	16日	17日
常陸惣七 (24才)	2,440	2,900	1,900	1,600	1,300	1,700	480	950	1,050	920	780
森下役蔵 (46才)	1,940	2,240	2,740	2,400	3,700	2,100	300	50	—	500	810
森下音五郎 (39才)	—	2,860	2,400	1,600	2,400	—	630	450	1,220	1,120	650
常陸虎吉 (28才)	3,100	2,560	2,200	1,840	1,840	1,640	—	—	—	—	390
土佐佐藤吉 (41才)	1,700	1,150	1,920	1,600	1,700	1,340	420	—	—	630	1,150
大黒辰二郎 (不明)	2,100	1,600	1,150	1,300	1,500	1,800	350	—	—	630	450
今津浅二郎 (58才)	1,800	2,000	880	1,640	1,860	1,440	—	—	—	—	920
村尻元吉 (24才)	1,840	1,480	1,600	630	1,560	1,160	630	—	800	500	500
角地役市 (35才)	1,620	1,940	1,700	980	1,700	1,000	520	300	350	800	300
村松平吉 (33才)	1,800	1,660	1,460	1,440	1,200	1,640	630	—	—	140	400
飛鳥楠太郎 (不明)	2,600	2,500	1,230	1,350	2,200	1,560	600	170	370	380	850
仙太郎 (不明)	2,400	2,200	1,450	1,050	—	2,060	130	—	530	230	900
小計	23,340	25,090	20,630	17,430	20,960	17,440	4,690	1,920	4,320	5,850	8,100
その他	32,700	26,150	26,440	17,470	29,110	24,320	6,150	1,040	1,310	3,210	7,200
合計	56,040	51,240	47,070	34,900	50,070	41,760	10,840	2,960	5,630	9,060	15,300

氏 名 (年齢)	計									
	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	貫 匁	銭 円
常陸惣七 (24才)	1,350	2,160	970	1,650	2,280	1,220	1,200	420	27	(79 08)
森下役蔵 (46才)	-	3,000	200	-	1,650	1,150	1,150	440	24	(70 67)
森下音五郎 (39才)	-	2,140	680	1,450	1,600	1,560	1,000	720	22	(65 19)
常陸虎吉 (28才)	-	1,140	800	-	-	1,500	680	70	17	(51 50)
土佐佐藤吉 (41才)	1,000	1,800	730	-	-	1,050	830	410	17	(50 54)
大黒辰二郎 (不明)	-	1,400	-	-	760	1,100	550	600	15	(44 34)
今津浅二郎 (58才)	-	1,960	860	-	-	1,250	670	-	15	(44 31)
村尻元吉 (24才)	-	900	220	-	1,150	870	1,100	50	14	(43 47)
角地役市 (35才)	-	920	250	-	-	970	600	550	14	(42 05)
村松平吉 (33才)	-	660	470	-	1,100	1,220	340	170	14	(41 56)
飛島楠太郎 (不明)	-	-	-	-	-	-	-	400	14	(41 21)
仙太郎 (不明)	-	970	500	-	680	-	550	550	14	(41 18)
合 計	2,350	17,050	5,680	3,100	9,220	11,890	8,670	4,380	212	110 (51 26 : 平均)
そ の 他	2,590	10,350	5,720	1,220	6,920	9,050	5,330	5,710	221	990
合 計	4,940	27,400	11,400	4,320	16,140	20,940	14,000	10,090	434	100

(注 : 1貫当り2円90銭)

表2 大正11年5月

アワビ個人別水揚実態(数量)

(単位:貫, 匁)

氏名(年齢)	11日	12日	13日	14日	15日	16日	17日	20日	21日	22日
森下晋五郎(40才)	2,420	2,660	770	4,460	580	820	1,600	820	400	-
常陸惣七(25才)	2,330	2,180	850	-	-	670	1,570	1,400	950	1,850
蝶々亀太郎(47才)	3,500	2,880	200	400	-	1,940	2,900	2,540	2,100	-
村尻元吉(25才)	2,560	1,740	860	1,300	-	450	630	1,250	580	1,400
村松平吉(34才)	1,180	1,720	580	1,720	130	370	1,100	1,250	1,500	-
森下役蔵(47才)	2,220	2,700	560	3,180	-	-	1,380	1,600	2,240	-
仙太郎(不明)	2,620	2,560	270	3,130	-	-	1,280	1,130	1,000	-
富浦喜久蔵(50才)	3,200	-	-	1,430	-	1,650	1,900	1,370	1,800	40
尾鼻重太郎(37才)	1,440	2,180	170	620	400	620	850	1,400	850	-
常陸虎吉(29才)	-	-	-	-	-	1,080	2,000	-	-	-
辰巳平五郎(21才)	1,730	2,400	580	890	60	320	760	180	800	-
土佐佐藤吉(42才)	2,120	1,920	390	2,400	-	1,000	900	400	750	-
小計	25,320	22,940	5,230	19,530	1,170	8,920	16,870	13,340	12,970	3,290
その他	26,860	33,760	6,570	730	100	9,850	14,730	10,910	12,700	550
合計	52,180	56,700	11,800	20,260	1,270	18,770	31,600	24,250	25,670	3,840

氏名(年齢)	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	計	
								貫	匁
森下音五郎(40才)	-	850	1,700	2,700	1,600	1,100	810	23	290
常陸惣七(25才)	1,170	2,000	1,550	1,750	1,200	1,330	450	21	250
蝶々亀太郎(47才)	-	160	1,550	1,000	1,400	110	30	20	710
村尻元吉(25才)	1,700	1,050	1,050	1,760	1,200	1,450	470	19	450
村松平吉(34才)	-	-	1,200	1,500	1,500	550	2,020	16	320
森下役藏(47才)	-	-	550	-	470	550	-	15	450
仙太郎(不明)	-	460	1,400	600	850	-	30	15	330
富浦喜久藏(50才)	-	280	1,450	400	-	120	-	13	640
尾鼻重太郎(37才)	-	-	900	2,300	1,600	110	200	13	640
常陸虎吉(29才)	-	-	2,260	2,900	1,400	1,170	2,070	12	880
辰己平五郎(21才)	850	750	1,020	1,080	750	400	-	12	570
土佐佐藤吉(42才)	-	-	-	100	1,070	450	160	11	660
小計	3,720	5,550	14,630	16,090	13,040	7,340	6,240	196	190
その他	1,300	4,390	13,000	12,360	16,670	8,030	1,580	170	930
合計	5,020	9,940	27,630	28,450	29,710	15,370	4,660	367	120

(注：1貫当り3匁22銭)

(52 64 : 平均)

歳 あのね、これ大正11年、こっちが10年のアワビの水揚帳（ただしコピー）でね。これですね。「新岩」とあるのがおじいさんですね。ここへ出とるお名前ね、お元気なのはおじいさんだけ？

岩 ほうよ、ほうよ。

歳 これ、新開福太郎さん。

岩 （やや感慨深げに）兄じゃ、私の兄貴じゃ。

歳 惣七は？

岩 常陸惣七、もう亡い、亡い。この人は勝浦におってな（勝浦へ移住した）、この人、勝浦で死んだ。

歳 それから大井の伊太郎さん。

岩 イタロー？だれじゃったろうか。分らん。

歳 おじいさんが31で、おじいさんより皆大体年上ですか？

岩 上の人もあるし、下の人が多いな。

歳 それから尾鼻重太郎さん。

岩 これ、若い時分に死んでしまうた。

歳 辰吉

岩 山下辰吉か、2～3年後（あと）に死んだ。

歳 仙太郎は御存知でしたか？

岩 分らん。

歳 あのね、この時分で漁のうまかった人は、あの、この中でね、アワビ獲るの上手な人はどんな人達？

岩 えーと

歳 音五郎さんは？

岩 この人も上手だったな。

歳 ハリダニ

岩 これもあんまり上手じゃなかったな。

歳 蝶々さん

岩 飛び抜けては、よけーないで。ほん、わずか。

歳 （森下）役蔵さんは？

岩 これもじゃな。

歳 惣七さんは？

岩 この人、上手じゃった。

歳 とら吉さんは？

岩 普通じゃな。

歳 山徳

岩 これもあかん、普通じゃ。

歳 おじいさんはどなんあったん。

岩 だれ？あかん、あかん。えらい人はよけーないで。

歳 角地岩吉さんは？

岩 これもあかん、なおあかん。

歳 この5月11日いうのは旧ですか。

岩 前のはみな旧じゃった。

歳 これは梅雨上ってから穫りに行くんですか。

岩 ほうじゃね、梅雨のちょっと前からいっきゃた。

歳 アワビ多かったですか。

岩 前には多かった。

歳 その時分でね、5月じゃったら16日しか入っとらんけどね。波が荒れて行かなん
だんですか。

岩 波があったら行かん。雨はな、少々こんまい雨だったらな、行っきょったけど。

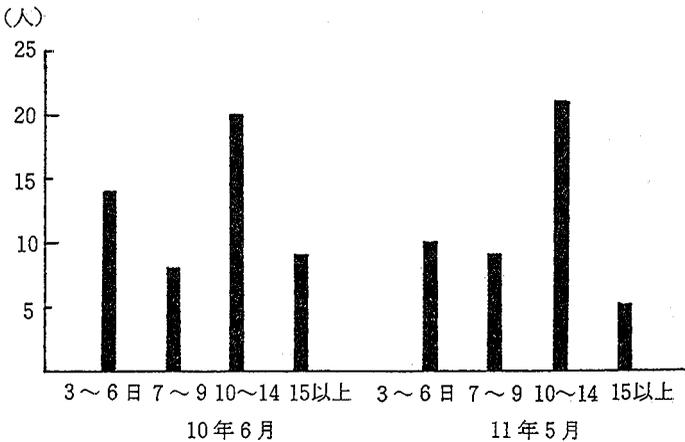


図1 大正時代の阿部のアマ達の出漁日数
(月は旧暦である。出漁2日以下の人は除いた)

図1は当時のアマの出漁日数を図示したものであるが、現在と比べて出漁日数は少ない。新開岩太郎さんは「あの頃の人はあんまり欲がなく、寒かったら、じきで（海から）上ってひとくち寝たりしよった。しかし、今の人は一度かついでシャツ着替えて、御飯食べたら、じきに（海へ）入る」という。又、オオアマは採り易い場所は人にゆずって敢えて採り難い深所ばかりをねらった時代である。小さい貝を取ると笑われた時代である。したがって表1、表2に、個人別月合計収量を（多い者の順に上位12名）並べたが、収量を比較するのは現代的感覚であって、当時は収量を競ったものでなかったかも知れない。収量順では10年6月は、惣七、役蔵、音五郎の順、11年5月は、音五郎、惣七、蝶々の順になっているが、1日当りの収量では惣七、音五郎より多い者がいる。月合計収量の多い者は1日当たり平均収量が比較的多い上に、出漁日数も多い。少々不良な天候でも出漁したのであろう。なお、10年6月も11年5月も共に50人以上のアマがかつぎに出ているが、10年6月にトップの惣七も、11年5月トップの音五郎も、共にその月の全水揚の6.3%を個人で挙げている。

表1、表2及び新開さんの証言以外に当時のオオアマの優秀性を証明する資料がないのが残念である。先年、惣七の兄の常陸虎吉の孫である公務員A氏を取材したところ、惣七の記憶は全くないが、祖父虎吉について、胸が厚くしかも前後に厚い感じだった、という。

2. A漁協における口開け

ここでは口開けの前日は全員休漁日となっており、アマ達は一日体を休める。それだけに口開けは勇んで取るから、その水揚げは、決定的なものではないにしても、個人の能力差をも現しておるものといえる。又、ここには海女はなく、海士だけで各自の水揚げが個別に記帳されるので、分り易い。非公開を条件に取材したので、現在より余り遠くないX年ということにしておく。

その結果は表3のようであった。この42名中のトップはNo.24氏（37才）で19.9キロである。昭和59年4月26日、彼を取材した。潜水能力について聞くと、人が測ってくれたのだが、毎回ヒトカシラは1分40秒であり、浅いところだったら、せい一杯おって、最高2分ぐらいならいける、という。表3でみる

と、表1、表2でも感じたことであるが、採貝能力は年齢に関係なく、表3では相関係数は極めて低い。ただ15キロ以上取っている者を見ると、20代にはなく、30代5人、50代1人である。30代でも35～38才が成績がよいようにみえる。

表3 口開けに参加したアマ達のアワビ収量

(単位: kg)

氏名 (年齢)	収 量	氏名 (年齢)	収 量	氏名 (年齢)	収 量
1 (24)	6.8	15 (33)	7.0	29 (46)	10.9
2 (24)	14.7	16 (33)	8.6	30 (47)	11.3
3 (25)	8.3	17 (34)	5.7	31 (49)	8.9
4 (26)	1.1	18 (34)	9.7	32 (50)	11.7
5 (26)	11.0	19 (35)	5.0	33 (50)	15.0
6 (27)	11.2	20 (35)	13.7	34 (50)	8.5
7 (28)	7.8	21 (35)	17.4	35 (50)	6.3
8 (28)	14.7	22 (35)	17.9	36 (51)	5.7
9 (30)	8.6	23 (37)	17.0	37 (52)	6.4
10 (30)	15.0	24 (37)	19.9	38 (52)	4.0
11 (32)	11.4	25 (37)	12.8	39 (53)	11.7
12 (32)	7.4	26 (38)	13.7	40 (57)	14.5
13 (32)	9.6	27 (40)	6.7	41 (37)	4.5
14 (32)	13.1	28 (44)	8.4	42 (70)	3.8

注：一諸に採取したウニ、ナマコ等は除き、オン、メンの含量のみを記した。

3. B漁協におけるオオアマ、コアマの収量差

オオアマは潜水能力・採貝力に優れているため、以前は採れ易い例えば浅みの貝の多い場所をアマに弱い者達にゆずり、敢えて深所にいどんでいたものだといわれる(伊島, 阿部, 志和岐等)。しかし昭和30年代後半よりアワビ種類間の価格差³⁾が生じ、浅みに住むクロアワビのほうが深みに住むメガイ、マダカよりも高く売れるようになった。又、海士の意識も変わり、個人主義的意識・平等意識が成長してきた。したがって、現在におけるオオアマとコアマの収量差は昔とは格段のものであろうと推定される。本項は、現在より余り遠くないY年に、B漁協管内でアマ漁を行った5人のアマに登場願ったものであり、7月19日から8月27日までのアマ収量・収入をみたところ、表4のようであった。

表4 5人のアマの収量・収益とその内訳（7月19日～8月27日）

氏名	出漁 日数	収 量 (kg)	粗収益 (千円)					計	特 徴	
				オン	メン	トコ ブシ	サザエ			
a	32	894.5	1,891	数量	3.5	32.6	0.2	63.7	100.0	メン、サザエを主に取る。
				金額	9.1	58.6	1.2	32.1	100.0	
b	32	609.5	1,429	数量	8.0	4.5	44.2	43.3	100.0	トコブシ、サザエを主に取る。
				金額	19.9	7.6	53.1	19.4	100.0	
c	30	235.4	1,336	数量	94.0	3.9	2.1	0	100.0	オンだけをねらっている。 サザエは全然取らない。
				金額	96.5	2.5	1.0	0	100.0	
d	26	137.2	357	数量	7.0	3.8	65.1	24.1	100.0	トコブシを中心に取る。 60才代。
				金額	16.2	4.7	69.4	9.7	100.0	
e	12	22.2	60	数量	16.1	11.0	30.5	42.4	100.0	時々採員に出る。70才代。
				金額	34.5	16.1	30.7	18.7	100.0	

注：B漁協のY年におけるアマ5人を選び、7月19日から8月27日までの採員の実態を表示したもので、採員中に獲れたウニ、タコ等はこの計算から除いた。

a氏は種類と重量から分るように、サザエと深みに住むメンばかり取っていて、値の張る浅みのオンは極めて少く、金額的にメンが半分以上を占めている。32日出漁し、その粗収益189万円である。年齢も34才の働き盛りで、深所を主体とする潜水能力に優れた本格的なオオアマタイプである。b氏は数量的にみれば、トコブシとサザエが大半であるから、どちらかといえば中アマタイプである。中年の男性で32日出漁し、こつこつと採員する。しかし粗収入が143万円もあるから、全アマ期間中には200万円を超えることは明白で、金額的にいえばオオアマに入る。これに対してc氏は中年の技巧派アマである。その理由はb氏の半分以下の収量で、b氏にほぼ近い収益を得ているからである。彼は値の張るオンだけをねらっていて、メンやトコブシはよくよくのことでないと取らない方針であることは、数量的にみても分ることである。サザエに至っては皆無である。重いフゴをさげて引揚げてくる仲間を尻目に、軽いフゴで、さっそうと引上げる気分—釣りの一発大物主義と似通った心境か。クロアワビは敏感で磐の奥にかくれてしまう。彼はおそらく沢山のトピツを持っていて、毎回クロアワビとの斗いを楽しんでいるのではないか。これも全アマ期間中に200万円を越すものとみられ、技巧派オオアマである。dさんは年齢が60代前半の海女

で、体力の問題もあるので、時々休みを取りながら同期間に26日出漁し、トコブシを中心を取っている。目に触れるものは、規格に合っているものならば、全部捨てる方式である。中アマ又はコアマに入るタイプである。eさんは引き合いに出すのはお気の毒であったが、犠牲的に登場して頂いた。年齢は70代前半

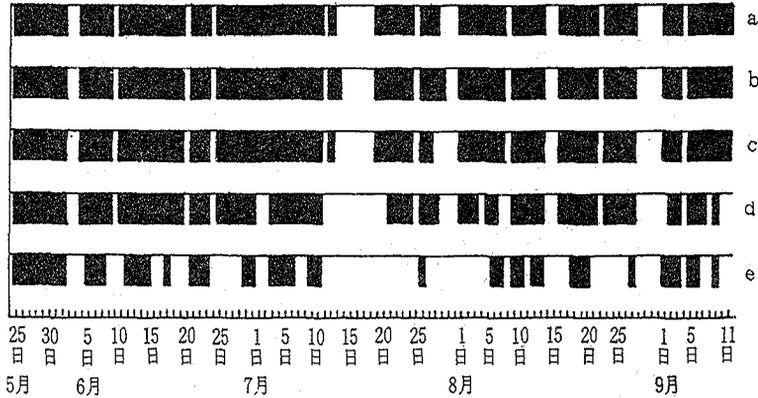


図2 全アマ漁期間中の5人のアマの出漁日一覧

の老海女である。図2で分るように、体の調子を計りながら、時々かつぎに出るいわば趣味アマに属するものである。(なお、図2と次の表5で分るように、a～d氏は夏のお盆休みはわずか2日しか取っていない。これは次の図3に示すように、いずれの種類もお盆前後に高値を呼ぶためである。)

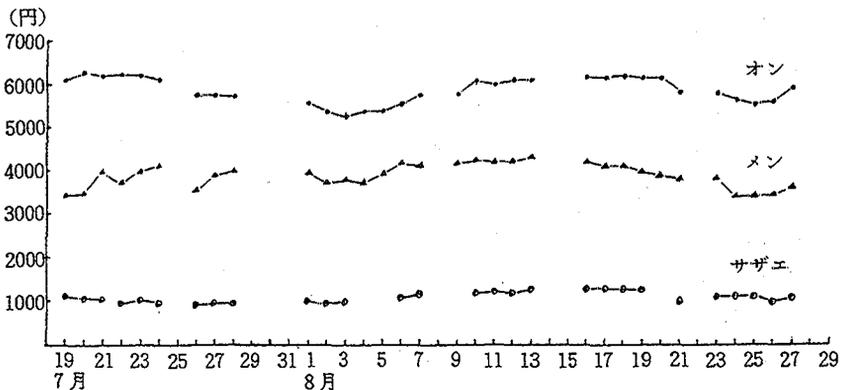


図3 オン、メン及びサザエの日別価格 (kg当り円)

さて、表4における各人の全収益を日別の内訳で示したのが表5である。1

表5 5人のアマの日別アマ収益

(単位：千円)

氏名	7月					8月															
	19日	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1日	2	3	4	5	6	7	8
a	12	48	83	67	59	72	-	73	42	45	-	-	-	93	48	75	38	39	50	85	-
b	19	42	65	63	67	71	-	80	63	25	8	-	-	42	48	56	18	13	69	91	-
c	33	35	62	74	44	52	-	96	33	-	-	-	-	60	39	46	-	28	61	25	-
d	-	-	12	20	7	20	-	21	17	4	-	-	-	13	13	20	-	5	-	-	-
e	-	-	-	-	-	-	-	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	8	-

9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	計
74	64	84	88	31	-	-	49	75	56	50	58	68	-	51	54	56	56	36	-	-	-	-	1,879
-	64	70	42	51	-	-	47	39	52	81	14	34	-	31	30	39	34	34	-	-	-	-	1,502
43	53	31	49	27	-	-	25	39	53	27	62	25	-	58	27	29	41	14	-	-	-	-	1,291
20	24	21	24	14	-	-	13	12	15	16	4	8	-	5	7	14	14	7	-	-	-	-	370
10	7	-	4	4	-	-	-	2	6	2	2	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	65

(注：ウニ、タコ等も含む。又、千円以下は四捨五入したため、表4と合計は異なる。)

日当り収益をみると、a氏5.9万円、b氏4.5万円、c氏4.5万円、dさん1.4万円、eさん0.5万円となる。そして1日当り最高収益は表5に示すように、a氏9.3万円(8月1日)、b氏9.1万円(8月7日)、c氏9.6万円(7月26日)、dさん2.4万円(8月10日、12日)、eさん1.1万円(7月26日)となっている。すなわち計算の結果は、オオアマと中・小アマの間に、このように驚くべき収入差が現れてくる。

しかし人生は収入だけではない。dさんの60代前半では、まだまだ子供や孫に金の要る年齢であり、一つのアワビ、一つのサザエでも多く採りたいもの。しかしeさんの年齢層では一般に達観的である。海に入れるわが身の健康に感謝し、海に入り貝を取り続ける生活、海と共に過す歳月の永さを生甲斐とし、体調のおかしい日は絶対に無理をしないのであろう。目を陸上に移ずれば、70

代の老女で日当5千円がかせげる仕事はめったに見つからない。eさんの永年海と過したキャリアがそれをもたらせてくれているといえるのである。岡氏¹⁾は阿部のアマ調査において、阿部で老海女の少い理由を、「女は年齢が進むと家事労働に制約されて次第に漁業から離れていくため」と説明しているが、時代は変わり、全国的に老海女がふえている。海女が仲々海から足を洗わない。それらの海村の多くが採用しているウエットスーツの保温性と安全性（浮力があるため溺れることが少い）が、海女の平均年齢を高めるのに加勢していることは否めない。

一方、かつてオオアマだった海士達は、視力が衰え、体力に自信がなくなってくると、アマ廃業を宣言することが多い。オオアマが中アマやコアマに落ちることは誇りが許さない。オリンピック選手の現役引退と同じ心境という。老齢化して腕の落ちたさまを後輩達の前にさらしたくないのである。そして多くは小規模の釣り程度で余世を送る。「海士の誇りと海女のしぶとさ」といえば語弊があるかも知れないが、全国的に共通のように思われる。

4. オオアマのたしかな眼

これはC漁協管内の中年オオアマHさんと、ほぼ同年齢のオオアマでないTさんとの対比である。話はTさんのアマ船に同乗したことから始まる。現在より余り遠くないZ年の8月4日である。アマの現代生活の一面をよく現していると思うので、当日のテープの一部を以下に展開する。

歳 毎日大変ですな。

T いやでいやで弱つとん。こんなに天気が続いたら体がえらいやろ（注：もう12日間連続してよい天気で、アマ休みがない）。

歳 たまに休みがあるとほっとするでしょうな。

T 休みがないことないけん。だいぶ体が弱つとる。漁より何より体気いつけてな、続いたら…（アマ日和が続いたらの意味）。今日や、アワビの一つか二つ取れたらええとこや（多少けんその言葉）。

歳 もうかなり取ったというか、総予定（総水揚げの意味）の半分ぐらい取ったんでしょう。

T え、半分以上取っとる。これからだったら、金もうけになれへん。こっちから先きはな。

歳 今年は照りが多いから、去年より出漁日数が多いでしょう。5割か6割は取ってしまったんでしょう。

T 7割ぐらいも取っとるか。これからは見込みない。

叔父 どこへ行ったらって一緒じゃ。何じゃおりやせん。

歳 ちょうど…もう30秒過ぎた（9時30分からアマ開始）。（叔父が脚から飛び込む）。

T 潜水病にかかった人と一緒やな。家におったらしんどい。潜らんなら…。海に潜ったら体がしゃんとする。海に入らんなら体が抜けたようになる。

歳 そしたら、9月の23日頃がきたら、さびしいですな。

T その頃には行くだけで、がいに商売にならん。

歳 （主人が海へ入り始める）。まず、タルをほうりこんでから海へ入ります。（9時）50分37秒です。（主人が11時15分頃上がってくる。上るのは「とも」のタラップからである。）（11時半頃、叔父も上がってくる。）

T 一番労働のきつい仕事やな。釣りは上で息（いき）しもって釣れるからな。

歳 息をとめてやるから…。

T （アマで）収入の多い家もあるだろうけどな、7月から9月24日まで、日割にかんじょうしてみ、アジ釣りに行っとんだから、ええ日だったら、何万にも何十万（円）もなる。

歳 夏のアジは相場がええでしょうね。

T アジか高級品になっとる。

叔父 昔は今みたいに、ようけアマがおらんしな、行く箸（ハエ）が大体分っとんじゃ。平吉いうおっさんが（行くところは）平トコバエいう名つけてな。

T 昔は人の行きよるところへは、ほかの人は行かなんだ。行儀がよかった。

叔父 今は早いもん勝ちみたい。昔はそうはせなんだ。

T これが一番好かん、アマが。

歳 釣るほうがええですか。

T 胃が悪いけん。海に入ったらな。胸がやけてやけてな。シロンばっかり飲んで…。

歳 シロン？

T パンシロンな。一回一回パンシロン飲む。

さて問題は次である。その日の午後4時過ぎ、オオアマのHさん宅を訪問する。

H あ、どうも。暑いだろう、今日は…。

歳 もう7割は取ったという感じと聞いたんだけど…。

H 4分通りいたね。 (後) 6分…。これからは休みが多いで…。こんなに (天気が) 続くときはめったにない。

表6 C漁協のZ年におけるアワビ類の水揚げ実態

	8月4日までの水揚げ (A)		総水揚げ (B)		8月4日までの割合(A/B)	
	重量	金額	重量	金額	重量比	金額比
オン	13,124.15	59,121,089	24,150.75	116,826,724	54.3	50.6
メン	2,022.25	5,373,026	7,329.36	21,146,639	27.6	25.4
トコブシ	1,689.55	4,224,950	6,516.90	16,919,303	25.9	25.0
サザエ	2,786.25	2,972,803	10,544.15	11,650,208	26.4	25.5
計	19,622.20	71,691,868	48,541.16	166,542,874	40.4	43.0

Tさんは7割ぐらいといい、Hさんは4割ぐらいという。それをZ年の水揚げ帳から計算してみたら、上の表6のようになった。すなわち、8月4日までの水揚げは、値の張るオンは重量的にみて5割以上取っているが、メン、トコブシ、サザエは3割まで至っていない。オン、メン、トコブシ及びサザエの4者を合計すると、8月4日までに取ったのは、重量的にみて40.4%であり、金銭的にみて43.0%であることが明白である。Hさんのオオアマとしての腕を現在、数的に立証できないのは残念であるが、若いときから腕のいいオオアマであったといわれる。毎日自分で潜り、又皆の毎日の水揚げを観察し、前年の総収量、今年の貝類の殖えかた等考え、総合的見方・感覚の上から、「4分通りいたね」というビタリとした言葉が出てくるのであろう。図4にC漁協のZ年におけるアワビの日別収量を示した。Tさんは7月29日頃からの緩やかな収量減少傾向を頭に入れて、もう後3割ぐらいしかないと思ったのかも知れない。実

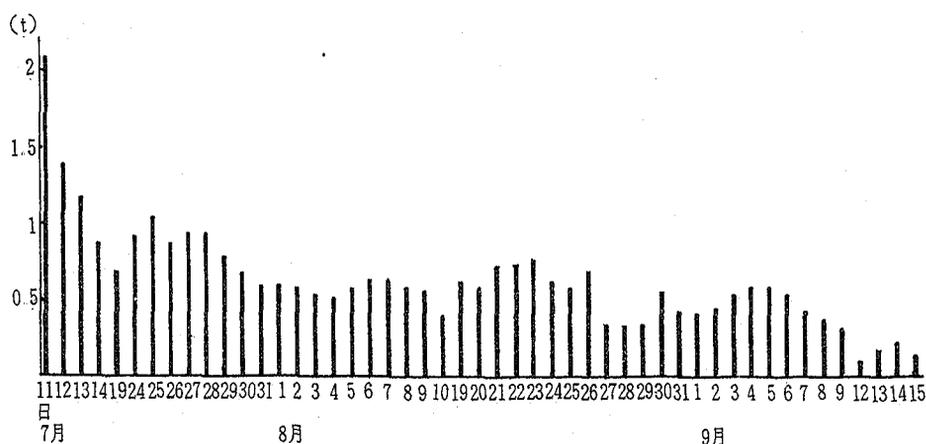


図4 C漁協におけるZ年のアワビの日別収量

際はTさんの思っている以上に取れたわけで、お盆の後から収量は盛り返している。中・小アマがアワビが取れなくなるとぼやき出してから、オオアマの独り舞台になると、オオアマ達はいう。オオアマはアワビの住むアジロを沢山知っているし、箸の奥に潜んでいるクロアワビを見つけるのがうまい。又、潜水能力に優れるから、中・小アマの行かない深所へ潜ってメンをとってくる。これらの経験・自信・総合的読みの深さがオオアマにはある。

5. オオアマの技術・方法について

オオアマの優れた技術や方法を科学的に立証する資料がないので、再びテープで代用する。

H ムクロはハエの下へおる率が多いんですわ。全然目に、見えんとこに…。手でさすってね。ムクロのよけー取るオオアマいう人だったら、大体8割まで手さぐりですわ。

Z年9月12日、その日は天気はいいが、波のうねりがやや高く、「はんぱ日和」なので、アマの出足は遅かった。1時少し前、Mさんという青年が（海か

ら)上ってくる。話をしていると、「先生、赤ガゼ食べますか」という。彼はフゴから出してノミで叩いて割り、後は素手で割って内身を出してくれた。塩味がしておいしく生き返る気持。彼のフゴの中にはクロが6個、メンが1個。フゴをかついて引き揚げる。Y氏が上ってくる。

Y Mさんの子でKちゃんというのがおるんよ。今のがそう。この人はごつい。ようけ取るよ。口が開いてから、もう2カ月も余ってな。ほたらな、取りつくしてしもうとる状態でな、あんまりおらんよなとるわ。それでも、後になるほど、よう取るぜ、あの人は。

歳 オオアまいう人は、まだこれから先、だいぶ取るわけやな。

Y ごついでな。

歳 初めのうちに馬力をかけて、もうそれで大体あきらめる人と、それから終始マイペースで行く人とあるわけやな。

Y そうそうそうそうそう。マイペースの人はな、いつ、いたてととくるで。

歳 へえー

Y 私らだったら岩の間のぞくで。それでアワビ見つけたら、それ取るわけやな。オオアマいうて、ようけ取る人はな、もう見るやかいは、10のうち1つやいう。見えとらんとこのを、みな取る。探って、こう手つっこんで、アワビひつついとるで。ポコッと分るらしい…じゃな。ふくれとるから…。ここにアワビがあるな…思うたら、これぐらいのノミがあるんじゃ、あれでキューと入れてな、ポコっとおこす。

歳 触ったと同時にござすんかな。それとも…。

Y アワビがあんまりおこらん程度にな、探るんじゃろう。そりゃ、さするハエが何万いうてあるからな、さする人となすらん人の差じゃな。さする人は見えんとこのを、みんな取ってくる。ウ、フ、フ。

歳 あの人(Kちゃん)遅う(海へ)いって早う帰ったな。

A女が上がってくる。

歳 何時頃やったかな、MのKちゃん、クロ6つにメン1つ取っとった。

A うち、これ、クロ3つ、あー今日ら、あかんな。

歳 トコブシはようけあるが。

A ほうよ。あの子、ようけ取るんで…。(私の)オイよ。

歳 遅う入ってな、早うに出てきてな(1時間くらいか)。

A ほうよ、ほしてな、いつでもな、深いとこ、かつぐんで…。

歳 Kちゃんっていうの、うまいからオンとメンだけしか取らんのかな。

考 察

オオアマの収量 3項で挙げたように、オオアマの収量・収益は中・小アマと比較にならない。他にオオアマ達の水揚げ例をV年D漁協についてみる。K夫妻：アワビ56kg（K氏は42才、この集落切つてのオオアマである）。Sさん（3人）：アワビ55.3kg。Fさん（38才、2人）：オン40.1kg、メン0.4kg。Fさんの奥さんは看護婦だということで、これはほとんどFさんの独力によることが推定される。ちなみに当日、オン4,950円、メン2,900円であるから、F家の収益は19万9,700円である。このように1人で30キロ以上あげることが推定される。D漁協では一軒で複数人が出漁することが多く、正確にはつかめないが…。釣りコンクールのように、アマコンクールができるわけではないので、表3のように、口開けの収量で腕を比較するしか方法はない。

オオアマの技術・方法 済州島から千葉へやってきて定着した海女達は、岩の下にかくれているアワビを取るのが苦手で、日本の技術についていけないという⁴⁾。日本の海女だって、ハエのしたをさすって取るオオアマはめったにない。それは平均的に海女は海士より肺活量が少なく、底での時間的余裕がないことが主因であろう。海士でも息の短い人は平均的に傷員がオオアマより多いという。時間が急ぐから手先が荒くなるのであろう。息の長いオオアマは、底で落ちつて仕事ができる利点がある。

身体的特徴と年齢

P やっぱり、今までの例取ってみるとねえ…、45ぐらいまでは、かなり取っていくわ。

歳 ハア

P ただし、45過ぎた場合は、眼が見えんよう…なってくるわねえ。それでやっぱり下り坂になって…（Q漁協での話）。

眼が大事で、視力が衰えるとオオアマの力は落ちる。阿部の大正時代の例では、惣七24～25才、音五郎39～40才、A漁協では35～37才、B漁協では34才、D漁協では42才、他にI漁協では41才…これらがその集落のトップアマで、最高の腕を発揮する年齢には個人差がある。

深く潜ると耳に強く水圧がかかるので、アマは耳を傷め易い。耳栓をする人もあるし、耳栓なしで平気な人もある。耳の強さも遺伝のようにいう人もある。体型については既述のように、胸の張った人がオオアマには多い。胸が厚く特に前後に厚いという。オオアマとして毎日、着実に仕事をするためには、他に大事なことがあり、タバコはいいが、酒は禁物である。酒ぎらいか、酒に対して自制のきく性格が必要である。深酒の翌日、潜ると体が機能せず、命も危い。腕がよくても酒好きの人はアマとして永続きしないようにいわれる。アマをやりたいが、身体的条件からできなく、漁師だけをやるという人が徳島県南部の海村には多い。以上のようにアマとなるためには条件が多く、その中でもオオアマは数少い。体は頑健で色々の条件を具備し、着実にまじめな人…となると、それぞれの集落では中心的、中堅の人物または将来、その集落にとって期待される青年が当然多いということになる。

おわりに

農水省統計情報事務所へ行って、管内の漁協の生資料を写すことがある。そのとき生資料（つまり漁協のアワビ収量）は印刷して数字が出るとまづいといわれることがある。2県だけであったが、それは公開的になると、数字の出所を問われ、今後、漁協が協力してくれなくなったら困るから…という。役所でさえそうであるから、漁村の収量・収入に立ち入ることは仲々困難である。筆者は信を得た漁協からは色々生資料を頂いているが、それでも個人の収量・収入となると一段と壁は厚い。税務署へ漏れはしないかというおそれからである。オオアマの実態を調べるとなると、「オオアマは能力の優れたアマ」という抽象的表現だけではアマの世界の解明はできない。したがって本稿で伏字的ではあるが多勢の方に御登場頂いたことに感謝すると共に、御迷惑をおかけしていることをお許し願いたい。ただ、アマは今後も生き続ける有望な生業であるので、過去・現在・未来の比較のために、記録は残し続けたいものである。

引用文献

- 1) 岡 芳包 (1956) : あま漁業の医学的並びに生物学的研究, 磯漁業地帯, 阿波研究叢書刊行会
- 2) 河野雄次 (1987) : アワビ漁, 徳島民具研究 1, 徳島民具研究会年報 P 31
- 3) 歳森 茂 (1985) : 「あま」のムラからの報告 (4), アワビの種類と価格差—その 1, 香川大学教育学部研究報告 1 (64), P 129
- 4) 金栄・梁澄子 (1988) : 海を渡った朝鮮海女, 新宿書房, P 47~48